E. M. フォースターの "The Other Side of the Hedge" について

扇　令　子

序

短篇小説において surprise ending は常套手段である。作者が種明しをし，謎は解かれ一件落着となる場合と，謎は謎のまま解釈は読者に任せる場合とがある。E. M. フォースターの "The Other Side of the Hedge"（『生垣の裏っ側』），(1)は後者の例である。

筆者はたまたま最近，通算して2，3年になるが，短大の女子学生とともにこの作を読む機会があった。学生は90分授業で4～5回で読了，1週間後レポート用紙1枚程度の小論を提出した。過去2回の学生のレポートは手元にないが，今年度の学生の論評と大差はない。1，2気付いた点があるがそれは後で述べることにしたい。筆者は教室ではなるべく個人的な解釈，論評は控え，学生の反応を待った。予測した通り，彼女達の関心は物語の結末に集中していた。

1

物語の荒筋は以下の通りである。

語り手の「私」は埃っぽい，両側には茶褐色のパリパリに乾いた生垣が続く道を，ひたすら歩いてきて疲労困憊している。ふと生垣の向う側に何があるのか見たくなり，生垣の割れ目に潜りこむ。悪戦苦闘して茨にひっかかれながら這い出したと思ったら，濠の中に落ちこむ。溺れかかったところを救い出してくれたのは50か60がらみの男であった。語り手は自分が 'park'（「猟苑」）あるいは 'garden'（「庭園」）と呼んでもよさそうな場所にいるのに気付く。彼を救出した男はそこがどういう場所か説明し，案内役を買って出る。人々は牧歌的生活を愉しみ，皆幸福そうである。しかしそこは「どこにも通じない」，前進も進歩もない，科学の法則が通用しない世界であることがわかる。いかに太平天国と見えようと牢獄にすぎない，と悟った語り手は，道路に戻りたいと案内役に告げる。それに彼の歩数計は停まってしまい，たった25という指数を示しているだけなのだ。しかし頑固な老人は彼を解放してくれない。まず門を見なければならないと言う。仕方なく彼に従いあちらこちら見物し，2つ目の門のある所まで来た時にはもう陽は傾いていた。とうとう疲れと飢えには勝てず，通りすがりの肩に草刈鎌をかついだ男からビールらし

き飲物をもぎとり飲んでしまう。一寝入りして酔いを醒ますようそっと寝かしつけてくれたのは，語り手が飲物を奪った相手の男だった。酔いが回り薄れゆく意識の中で語り手が見たものは，1，2年前道路に置きざりにしたほかならぬ自分の兄弟であった。

学生がとりあげた事柄の中で最も多かったのが次の2点である。生垣の向こう側とは（A）どのような世界なのか（B）語り手の「私」の身に起ったことは何なのか，この場所に来たということは何を意味するのか——以下（　　）の中の数字は学生数を示すが，複数の項目にかけている者もいる。なお学生総数は72人である。

（A）については，1. 死後の世界（38）　2. 死後の世界ではないが，現実世界とは違う別世界(20)　3. 全くの幻想，空想，夢の世界(5)　4. あえて定義づけをしない（6）　5. わからない（10）という結果になった。

1. 死後の世界には3通りの解釈がある。いずれも天国とみなされているのであるが，① 魂の安住の地，純粋な心の持主が生きる世界（3）　② 時の流れが止まり，万事が相対的な価値しか持たない，いわば無の世界（25）　③ 一見平和な世界，実は恐ろしい牢獄のごとき世界（10）

この天国を至福に満ちた楽園として肯定する者はごく僅かで，前進，競争のない世界を無意味で価値のない世界であるとして否定する者が圧倒的に多い。更に2．死後の世界とは違うと解釈した者の中で，人類にとっての理想郷，生死を越えた永遠の生命の流れる世界，等の積極的にこの世界を肯定する立場（10）と現実世界から逃避した落悟者の世界（10）と2通りに分れる。この別世界を忌むべき場所として否定する者が半数を占めている。

あえて生垣の裏側がどういう世界か明らかにしなかった学生の場合，だいたいにおいて作者フォースターの意図を正しく摑んでいる。これについては後で述べることにする。

5．の幻想，空想，夢と解釈した場合も，背定的な見方と反対に悪夢とみなす者，半々である。

以上述べたことから容易に推察される（B）の語り手が生垣を越えて向こう側に行ったということは，1．語り手は25才で死んで天国にいる。2．現実世界を越え別世界にいる。3．語り手は夢を見ているか，空想，幻想の世界にいる。4．生死の境をさ迷っている。ということになる。

1．の天国は（A）で見てきたように，大体において行かないで済むなら行きたくない場所ということになる。2．の別世界にしても，人生からの脱落者である語り手に，もと居た現実の世界がいかに生きるに値する場所であったかを悟らせ，戻りたいと痛感させる世界でしかない。

このような学生諸嬢の解釈は筆者にはいささか以外であった。生垣の裏側が死後の世界で，語り手は自分が死んだとは知らずにいるとする見方は充分予測できた。だが，天国を敬遠する者が

このように多いのには少々驚いた。安らぎはあっても刺激に欠け，苦悩がないかわりに生き甲斐も見出せない，出口なしの閉ざされた牢獄としての天国とみなされているのである。

2

次にフォースター研究の専門家達の論評をみることにしたい。筆者が目を通した範囲内で“The Other Side of the Hedge”に一言なりとも言及した批評論文は19篇。ほとんどが僅か数行のコメントで，多くても2～3頁程度割いているだけである。フォースターの他の短篇小説にくらべさほど注目を惹かないのも，かなり短い短篇で軽い小品と受けとられていることにも一因あるかもしれない。

生垣の向う側を死後の世界と考える批評家4人――すべて天国あるいは楽園と解釈している。いかなる世界か明らかにしないのは15人。学生の解釈とくらべ，死後の世界とみなした批評家の割合は遙かに少ない。ともあれ最も注目すべき点は，死後の世界とはっきり述べなかった批評家の中で，この世界を価値ある世界として肯定する者で大勢を占めていることである。そして，この見解が最も妥当ではないかと筆者自身は考えている。

3

では学生と批評家との解釈の傾向に違いが生じるのはなぜであろうか。一つには読みの浅さ，深さがあげられる。これは言うまでもないことであろう。ただ，学生が小論文――もっとも大部分は印象批評的感想文――を作成するにあたってどのような状況であったかを断わっておきたい。学生は英文科専攻ではなくフォースターについての予備知識も乏しい。和文，英文いずれにせよ批評論文はまず目に触れていない。それでなくても先に述べたようにこの作品を詳細に論ずる英米の批評家は極めて少ないし，我国におけるフォースター研究家でも紀要論文は別として，この作品を単行本としての批評書に所収している例はまずないと思う。という次第で学生達はこの作品にいわばほぼ白紙状態で接したわけである。フォースター研究の専門家とはくらべようもない程，作品解釈の上でハンディキャップがある。作家に関する情報，たとえばその思想，文学技法上の特徴などをある程度踏まえていれば，当然読みを深める上で有利となっていたかもしれない。

しかしながら，読者の側にばかり責を負わせるのはいささか公平さを欠くことになろう。というのも批評家の間でもこの作品の結末を廻り，又内容全体に関し異論があり，評価も全く正反対という場合すらあるのだから。ということになると，作者フォースターの側にもこのように様々な解釈を惹き起す要因がありそうである。彼の描き方が問題になってくる。

4

まず "The Other Side of the Hedge" の形式に目を向けてみよう。フォースターの長編小説は象徴と詩を豊かに含みつつも，社会喜劇小説の流れを汲み，リアリズムの土台の上に築かれている。短篇小説の方は趣を異にして，幻想と寓意の色彩が濃い。"The Other Side of the Hedge" もその例に漏れず，批評家達は，'allegory'（アレゴリー，寓意物語），'fable'（寓話），'parable'（=short allegorical story（寓話，たとえ話），'fantasy'（幻想（的作品））と定義づけている。寓意やたとえ話の文学は，リアリズムの傾向の強い文学より概して読者の作品への読み込みを要求する。神話，伝説，説話，古典，聖書，等々の知識を喚起させられるかもしれない。"The Other Side of the Hedge" ではそればかりでなく幻想の要素が入ってくる。幻想は論理や常識以上の何かを読者に求める。フォースター流の言い方をすれば，「決して起りえないことが起り，方法や題材が変っているので普通の小説より余分の適応を要求する」(2)のである。"The Other Side of the Hedge" は寓話であり幻想的作品である。「幻想を受け入れないことは想像力の貧困を意味するものではない」と，フォースターは「小説の諸相」(3)の中で断っている。これは読み手の感性と資質に関わってくる。幻想的要素を抵抗なく受け入れられる読者と，そうでない読者とで "The Other Side of the Hedge" の受けとめ方が異なるはずである。学生の中に，何度読んでも作者が何を言いたいのかよく（又は全々）わからなかった，と感想を述べた者が5人程いたが，その内であまり現実的でなくよくわからないと述懐している者がいる。現実の日常生活ではありえない事件や事柄を，幻想は幻想としてそのまま了解することができなかったためと思われる。

寓意と幻想が "The Other Side of the Hedge" の形式上の特徴であるが，殊に寓意物語，すなわちアレゴリーの要素が強い。アレゴリーは，主として抽象的（精神的）な観念を具象的なもの（人，動物）を借りて比喩的に表現する文学形式である。

"The Other Side of the Hedge" がアレゴリーであることを立証するものは，道路と庭園である。道路は，人との競争にあくせく暮らす単調な日常生活，又は人生を表わしているといえよう。庭園は幾通りかの解釈が可能であるが，前述した通り筆者は，生死を超越し，いつの時代にも存在している，真，善，美が実現される理想的精神世界と考える。この解釈を前提として以下論じてゆくことにする。

庭園で最も関心を唆るのは2つの門である。いずれも濠にかけられた橋の向う側の生垣の隙間にはめこまれている。最初の門は外に向って開いていて，2番目の門は内に向って開いている。前者を 'false dreams'（偽りの夢）後者を 'true dreams'（真の夢）と解釈する批評家達がい

るが(4)，これを裏付けるのが語り手を救出した老人の説明である。最初の門は，「人類が遠いむかし初めて歩きたい欲望にとっつかれたとき，まさにこの門を通って出て行った」のであり，後の方は「この門を通って人類は――まだ残っているかぎりの人類は――我々のところへ入ってくる」のである。老人の暗示的な言葉「我々はそれらの門を決して使いはしないけれど」が，これらの謎めいた門の象徴性をより明確にする。

歩きたい，すなわち前進したいという欲望にかられ，ここを出て行き門の向こうに続いている例の埃っぽい道を人類は歩き始めた。目的地は――語り手が老人に言ったように，――どういうところに達するのかわからないで。だがこの庭園へは生垣を抜けて「先を越した者，競争に遅れた者，死んだとして見棄てられた者」がやってくる。たとえば，偉大な教育者イザベラ・ディンブルビィが，語り手自身が，そして最後の例が彼の兄弟という具合に。老人は更にここが「全人類を迎えるようにできてはいるが，なかなか一杯にはならない」と述べる。真の夢――真，善，美の調和した内面生活――を追い求めようとする人々がこの庭園，すなわち彼らの目的地にやってくるのである。

5

さて前章では庭園について，そのアレゴリーとしての意味付けを試みた。次に道路から生垣を越えてきた人間として，語り手は庭園をどのように見ているか述べてみたい。語り手にとって，庭園はいかに美しく広々としていようと「牢獄」にすぎない。生垣は彼と道路を隔る「障壁」とみえる。なぜならこの場所は「どこにも通じない」と知らされたからである。それゆえ一刻も早くここを脱け出したいと考える。この国も，そこに住む人々も彼は信用する気になれない。生活様式も，価値観も，道路の側のそれとは異なり，むしろ相反するからである。断固としてこの世界を否定しようとする態度は，親切に差し出された飲食物を口にせず，貰った美しい花をこっそり捨てることからも明らかである。

案内役の老人に対抗して彼は道路の側の生き方，価値観がいかに正しいかを主張する。「科学と競争の精神――これが我々をして今日あらしめた力です」と述べ，「前進」することが人類の運命であると告げる。彼が科学の法則を援用し，論理的に雄弁に語れば語る程それだけ皮肉な響きが強まる。物質文明を礼讃する，「見えざるもの」の世界の存在をなおざりにしてきた人間の愚かしさがここにある。フォースターの現代人の生き方に対する批判が伺われる。

しかし，あくまで垣根の向こう側の世界を拒否しようとして心身ともに疲れ果てたその時でも，彼は昂然として「われに人生を与えよ。その奮闘や勝利，その失敗や憎悪，その深き道徳的意味や未知の目的地など共に！」とつぶやくのである。科学万能の競争社会で単調な灰色の日々に悩まされ疲れ果てた人間の姿がここにある。しかも彼はうんざりしながら，成り行きには抗す

ることができないことを知っている。くじけまいと我と我身を励ます人間の切々たる心情が伝わってくる。彼の姿はまさに現代人を象徴している。

学生の多くの者が，語り手の言葉に大いに共感したのも，その一言，一言に切実なものを感じたからに違いない。彼の中に現代人の姿が投影されていると見たのであろう。次のように感想を述べている学生がいる。「主人公の何かを模索し，苦しむ姿に共感をもつ」まさにこのことが，学生達に，道路の生き方には問題があるにしても，平和な，苦悩もない太平天国である庭園より，道路に戻った方がましだと思わせた要因なのである。

しかし，我々は語り手が2番目の門を通して再度あの埃っぽい，単調な道を見た瞬間，「あらゆる自制心を失ってしまったかのような妙な不安にとらえれた」ことを見逃すわけにはいかない。彼はひたすら前進するという「人類の運命を忘れ」ついに通りすがりの男からビールを奪う。この国のものを受け入れたのである。彼が不安にとらえられたのは殺伐とした現実世界の未来に危慎を抱いたからではないだろうか。

語り手がビールを失敬した男——実は語り手の兄弟——は肩に草刈鎌をかついでいた。これはなるほど死神のイメージである。ある批評家は庭園を死後の世界とみなし，兄弟が語り手を安らかな死へと導いたと述べている。(5) 又死後の世界と解釈した学生は前述の通り，多数いたわけだが，死を「虚無感と一種の優しさ」「ベールに包まれた不思議な優しさ」と形容している者も2，3いる。「路上に置き去りにした兄弟に逆に助けられたことに心が暖まるものを感じた」と告げる者も数人いる。眠り＝死と結びつけるため，この解釈が出てくるわけだが，筆者はこの考え方は必ずしも妥当とはいえないと思う。

フォースターの作品では，しばしば，眠り，失神は，作中人物が人生の真理に開眼する瞬間に起る。この短篇小説でも，「一寝入りして酔いを醒ますため」と書かれていることからも，筆者は語り手が，単調な日常生活にうんざりしていた折，ふと一瞬，真実な内面世界を垣間見る貴重な経験をした，と解釈したい。

兄弟による魂の救済は，フォースターの小説の世界ではなじみのテーマである。長篇小説 *The Longest Journey* がその好例といえる。

もし，死ということであれば，古い自己が死に新たな自己が生まれるということである。というのも，実は語り手は既に濠の水に浸り洗礼を受け，路上の古い自己が死に，新たに再生した自己がこの世界の一員となっていたのだ——自分ではそれと知らずに。最終的にこの国を受け入れることにより——ビールを飲む行為によって——二度目の死を経る。そして完全に真実なる新しい自己が，精神の理想郷に再生すると解釈することも可能であろう。というのも，五官が忘却の淵に落下しつつある時，彼は「ナイチンゲールの魔法の歌や，目に見えぬ乾草の香りや，光あせゆく空を貫く星辰などを知覚した」と語るのである。美しい楽園の，真，善，美を彼が獲得した

証しと我々はみることができよう。

結　び

以上が筆者の "The Other Side of the Hedge"の解釈である。

フォースターは不可解で語りにくい作家であると度々指摘されてきた。彼の立場がどこかを発見するのは容易ではない。態度保留の姿勢をとるからである。問題を提起し，解答は読者一人一人の胸の内に任せる。我々は彼の顕著な特徴である対立的世界の衝突を通して，真実を見い出すよう要求される。彼の願いは，相対立する世界の結合，調和であるが，それがいかに困難かを彼は十分認識している。認識しているだけに安易な妥協は打ち出さない。認識の基盤には，現実の多様性をあるがままに見極め，その中で均衡を保つという至難の業をめざす決意がある。

彼は，科学万能の競争社会の弊害を認め，かつその中で苦悩しつつも生の喜びを見出さねばならないと深く感じている。語り手の「私」のつぶやきにフォースター自身の声を我々は聞くのである。1904年のフォースターのつぶやきは今なお現代の我々のつぶやきでもある。

ところでフォースターは「事実とありそうもないことをごっちゃにしてしまいには，読者にどちらがどちらか分らなくする 'fantasy'（幻想）を好む」(6)と述べている"。"The Other Side" of the Hedge" の結末で，語り手の兄弟に草刈鎌をかつがせたのは，幻想を好みその効果を十分にわきまえているフォースターの遊び心がしのばれる。

注

(1) "The Other Side of the Hedge"（1904）は後，*Collected Short Stories*（1947）Penguin Books に所収される。本論では Penguin 版を用いた。
翻訳本は大沢実訳「天国行き馬車・永遠の瞬間」（南雲堂）と，同書名で，村上至孝・米田一彦訳（英宝社）を参考にした。なお，大沢実訳では「垣のむこう」，村上至孝・米田一彦訳では「生垣の裏っ側」となっている。

(2) E. M. Forster, *Aspects of the Novel*（Edward Arnold 1927）Fantasy の章参照。

(3) 同上

(4) Alan Wilde, *Art & Order: A Study of E. M. Forster*（Peter Owen 1964）, p.67. George H. Thompson, *The Fiction of E. M. Forster*（Wayne State University Press 1967）, p.60. Claude J. Summers, *E. M. Forster*（Frederick Ungar Publishing Co. 1983）, p.243.

(5) 上述のClaude J. Summers は，'a figure of easeful death' として語り手の兄弟を解釈している。

(6) E. M. Forster, *Two Cheers for Democracy*（Edward Arnold 1951）所収の "A Book that Influenced Me"（1944）, p.215.